二〇一七年一二月二二日

黄金の夕日差しこむ枯木立　みどり
吟行の余韻に浸る柚子湯かな　うつぎ
柏手に居向き変へたる冬の鯉　たか子
人目気にせずに着膨れ吟行へ　さつき
供華の菊枯れ果ててをる塔婆かな　ぽんこ
柚子風呂にあごまで浸かる至福かな　そうけい
鬼柚子の凸凹顔に太りけり　そうけい
玉砂利にシート広げて年の市　菜々
風紋に足跡しるき鴨の浜　なつき
ショールーム赤きベンツと聖樹かな　はく子
吟行子師走の街を左見右見　うつぎ

二〇一七年一二月二一日

たあいなき話肴におでん酒　宏虎
大根干す禅僧きりりと襷掛け　菜々
海風が頬刺す寒の露天の湯　やよい
カーテンを全開にして窓小春　さつき
大霜の路シャリシャリとバス来る　よし女
凍て空に研ぎ澄まされし匕首の月　はく子
万象の影絵となりぬ寒夕焼　満天

二〇一七年一二月二〇日

禅寺の枝てふ枝に懸大根　せいじ
朝霜の花めくフロントガラスかな　明日香
炭焼きの煙を挙げて峡深し　やよい
帰り待つ程よくしみてぶり大根　こすもす
須臾消ゆる沖の漁場の時雨虹　よし女
悴む手もて雑巾を絞りけり　更紗

二〇一七年一二月一九日

年の瀬の一つづつ消す備忘メモ　満天
カラカラと軒に奏でる凍み豆腐　智恵子
蔦からむ土蔵に錆びし和錠かな　愛正
戸を繰れば叱咤のごとく虎落笛　せいじ

二〇一七年一二月一八日

呼び込みの声錯綜す年の市　菜々
冬夕焼ガードレールも茜色　明日香
白鷺の独り立ちをる枯田かな　みどり
温泉煙に見え隠れする寒椿　みどり
街頭の聖樹に和して工事の灯　なつき
白菜を真二つに割り日に晒す　三刀
畦道のこんなところにたき火跡　明日香

二〇一七年一二月一七日

空白の日にも想ひ出日記果つ　更紗
木枯らしにもんどりうつて祈願絵馬　さつき
新たなる覚悟十年日記買ふ　なつき
枯れてなお刺の強さよ山薊　治男

二〇一七年一二月一六日

スーパーのカートぶつかり合ふ師走　よし女
極月のひととき街の露天湯に　はく子
裸木の道路駈けゆくつむじ風　明日香
立ち食ひの屋台繁盛年の市　菜々

毎日句会みのる選・二〇一七年一二月二五日